

起請文
名稱

御旗本衆進出テ、廣言吐テ吞給ケレバ、町人下々迄勇ミ進ンデ不殘吞ニケリ、

〔下學集下 藝キシヨウ〕起請キシヨウ 誓文セイモン。

〔運歩色葉集幾〕起請

〔易林本節用集幾 言辭キシヨウ〕起請文キシヨウ

〔野槌下 四〕起請文と云事、もろこしに盟誓をたて、牛馬の血をす、り其詞を記して、土にうづみ約する處、若そむけば、此牛のごとく、きりほふる、罪にあたらんと、諸神にちかふ也、○中 日本紀に、誓約の字をうけひとよめり、起請の字是訓によりて、うけをたつるといふにや、なをおぼつかなし、

〔松の落葉四〕起請

續日本後紀十二の卷、承和九年のくだりに、大宰大貳上奏四條起請といふことあり、其四條を見るに、みなもとしかく、せしことをあらためてかうく、せんとこへるなり、發起して請ふこゝろにぞありける、今の世にちかふこゝろにいふは、いたくたがへり、

〔貞丈雜記九 書札〕一起請文と云ふ事は、事を發起して、主君へ請ひ願ひ奉る狀の事也、三代實錄に見

たる小野春風が起請、不慮の用心の爲に、御調物に奉る布を以て、保侶一千領と糒袋とを作り置きたき由請ひ奉りし文也、又誓詞を書きのべたる起請文も、神佛へ對し、神罰佛罰を請ひ奉る文也、佛神に對しての起請文は、慈惠僧正より始りし也、

〔世事百談〕起請

徒然草に、起請文といふこと、法曹にはその沙汰なし、いにしへの聖代、すべて起請文につきて行はる、政はなきを、近代此事流布したるなり、○中

〔官職制度考五 制度〕堅メ。